

昭和二十年の宗教学研究室日誌

ここに紹介するのは、昭和20年1月1日から6月25日までの宗教学研究室日誌である。記入者は田澤^{やすさぶろう}、康三郎副手・文部省戦時特別研究生（昭和13年卒、松緑神道大和山初代教主、1914-1997）、中野^{はたよし}、幡能助手（昭和18年卒、大分県立芸術文化短大名誉教授、1916-2003）、戸田義雄学生（昭和18年卒、國學院大学日本文化研究所名誉所員、1918-2006）、野村暢清学生（昭和20年卒、九州大学名誉教授、1922-2007）である。

日誌は宗教学研究室のキャビネットの引き出しに保管されていた帳面に25頁にわたって記されていたものである。帳面の左扉には「宗教学懇談会記録簿 自昭和十年四月」と記載され、昭和14年までの研究会（講師には岸本英夫、小口偉一らの名前が見え、学生も出席している）、研究室旅行、予餞会等の記録が残されている。右扉には「宗教学科写真帖」の記載があるが、写真帖として使用された形跡はなく、代わりに昭和19年と昭和20年の研究室の事務日誌となっている。

宗教学研究室にはこの他、大正13年～昭和4年、昭和16年～17年の同様の日誌が五冊保管されている。これらについては磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教—姉崎正治の軌跡』（東京堂出版、2002年）所収の年譜作成や、宗教学科の歴史を概観した拙稿⁽¹⁾執筆の際に参照することができたが、昭和19年、20年のものは当時所在が不明で、今回新たに目を通すことができた。

この日誌を活字におこすことにした一つの契機として、昨年の年報に奥山倫明氏が「岸本英夫の昭和20年」（『東京大学宗教学年報』26号、2009年）を發表されたことがある。その中に岸本英夫（当時助教授）の日記が紹介されているが、同じ時期に記録された宗教学研究室日誌も、終戦前後の日本の宗教研究や大学をとりまく諸状況の研究にとって有意義な資料となるのではないかと期待する。

興味深かったことの一つに、東京大空襲（昭和20年3月10日）に前後する時期にも大学の授業がまがりなりにも続いていたということがある。終戦前後の時期については大学の授業科目等の情報が記録されている便覧類が失われており、漠然と、戦争の混乱で授業どころではなかったと思いこんでいたが、そうでなかったことがわかる。昭和19年7月25日の日誌によると、「文学部戦時研究動員中の宗教学研究室の案」は次のようなものであった。

- ・石橋先生は 木、八—十 学生指導
- ・一週三日の先生方の出室は助教授なき故両講師の出場を仰ぐこととなる⁽²⁾
- ・一日一回、全職員顔合わせをする
- ・一年は概論のみ、（三時間）千葉⁽³⁾
二年次上は、研究室にて先生方の指導

昭和20年2月21日には「岸本先生御講義（神秘主義、質疑応答の形式によってすすめられる画期的授業）あり」という記述が見え、4月開講の岸本「日本宗教史略説」は三回で終

了した（奥山前掲論文，24頁）。これは空襲の被害をさておいても，聴講すべき学生が残り少なかったという事情による。

すでに脇本平也氏（昭和19年卒，東京大学名誉教授，1921-2008）をはじめ，健康な学生は出征していた。配属先部隊で「ユダヤ教ノ史的研究」の聴講ノートを持ち歩いているのを見咎められた小池長之氏（昭和22年卒，東京学芸大学名誉教授，1923-2001）は，「この続きの講義が聞きたいものなのう」と将校に言われた珍談を葉書に書いて寄越している⁽⁴⁾。

他に，姉崎正治の旧蔵書に関する発見もあった。昭和19年9月12日の日誌に，田澤副手によって「MA本の整理を野村宮部両君の協力の下に行ふ」と書かれている。以前に姉崎正治蔵書目録⁽⁵⁾を作成した際に，研究室所蔵の「MA」というラベルの貼られた本の来歴が不明であったが，ひとつ謎が解けた形となった。また，昭和20年5月20日の日誌には「図書館五階姉崎先生の書物の主要なるものの荷造り」という記述がある。「書物」とは姉崎の著書なのか蔵書なのか不明だが，これもMA本または，研究室所蔵の姉崎正治関係資料の由来を知るためのヒントとなるだろう。

この資料を単に懐古的な意味で紹介するには遅きに失した感があり，あと数年でも早かったらという残念な思いがないではない。しかし，電報一本でただちに軍務に就かなければならないという緊迫した雰囲気など，往時を知らない世代が読んでも味わい深いものがあるのではないだろうか。（高橋 原）

註

- (1) 高橋原「東京大学宗教学科の歴史—戦前を中心に」『季刊日本思想史』72，2008年，153-169頁。

- (2) 1944年の教員は，石橋智信教授，岸本英夫講師，大島清講師であった。
- (3) 9月8日付日誌に「千葉疎開中止」とあり，頓挫した千葉への疎開計画があったと思われる。
- (4) ちなみにその続きには，「前線ニ行ッたら「ミスティックス」ノ本ト共ニ散華スルカモ知レナイ。ワカラヌ連中ハ「最後迄メウナ男ダッタ」トイフカモ知レナイガ，今迄習ッタ事デミスティックスガ最モ役立チ居リ候」とある。
- (5) 鈴木健郎・高橋原「姉崎正治蔵書目録（東京大学所蔵分）」『東京大学史紀要』17号，1999年3月

*

凡例

一，原文は縦書き。罫線付きノートに万年筆で書かれている。

一，改行位置，句読点など，読みやすさを考慮して適宜変更を加えた。

一，旧字体は新字体に改めた。

一，判読不能な文字は■で示した。

一，原文にない注記等は〔 〕で表示した。

昭和二十年度

一月一日 月曜

遂に昭和二十年の新春を迎ふ。本日空襲なし。昨日の空襲は余りにも大きい被害を蒙る。一機つつ二回来襲。それにしては大きい被害ではあった。 中野助手

一月二日 火曜

本日遂に空襲なし。別に変わりたることなし。田澤様にはひどい雪の中を大変な宗教報国ではある。 中野助手

一月三日 水曜

空襲なし。何とはなしに淋しい気持ちもするが名古屋大阪浜松地方は大変な事と思ふ。九十機来襲。今年こそはの意気込を以て戦力増強に盡さねばならぬのである。 中野助手

一月四日 木曜

二週間余の留守へもどってみれば中野助手は
応召不在。何の別れも告げえざりしは予定が
のびた小生の怠りの故である。詫びんにも詮
方なし。はるかに武運の長久を祈るのみ、在
室一年余の厚誼を謝して余りあり。来室者、
戸田君、倫理の大内三郎氏、小口〔偉一〕氏。
中野君の後始末のため石橋先生宅へ参向。

一月十三日（土）

来室者、戸田、宮部、野村君。大島先生ご講
義あり。外になし。

〔これより戸田義雄記〕

一月十五日（月）

田沢先輩、明日、中島飛行機古泉製作所へ出
張の為め多忙。来室者、岸本先生、宮部君、
山内〔源陸〕氏（哲学卒、田沢先輩と同期）
大島先生、岸本先生、御講義なし。

一月十六日（火）

午前中に所要あり。正后来室す。石橋先生御
講義はなかりし模様の如し。来室者 今城昭
男君（聖学院中学四年生、浦高第一次突破）、
山本森康君（都立豊多摩中学校五年生、新高
第一次突破）

一月十七日（水）

岸本先生御講義あり。来室者、宮部、野村、
今城、三君。大島先生宛職域分会届を御送附
す。

一月十八日（木）

来室、宮部、今城、島昭二（都立豊多摩中学
校五年生、四高第一次突破）、三君。

一月十九日（金）

宮部、野村両君、中島行（勤労働員）。不健
康のため棄却となりし由。斯学のためには喜
ぶべし。されど両君の心の中いかばかりかなら
む。石橋先生九時半頃御来室直ちに帰宅さる。
来週より金曜午前のゼミナールは午後一時に
変更となる。研究テーマは、かねて 本研
究室綜合協力研究の課題として提出中の、

「諸宗教の東亜的要素」を採る。来週は石橋

教授全般に亘つての御講義あり。次回よりの
研究発表分担を決定する筈。

来室、岸本先生、齋崎氏、宮部、野村、二君。
午後二時頃警戒警報発令さる。

一月二十日（土）

来室、野村、今城二君。

一月二十二日（月）

来室、宮部、岸本先生。教授会あり。石橋先
生御出席。

〔これより田澤康三郎記〕

一月二十四日（水）

昨日夕方作業からかへりました。留守中、戸
田君のお世話を頂いて感謝して居ります。

今日は小口氏の外に、岸本先生、宮部、宮手
〔文子、日本宗教学会嘱託。野田幸三郎夫人〕、
野村の諸君と美学の松原〔三郎〕君来室。外
になし。

一月二十五日

一日寒風の甚し

戸田君、野村君、等来室。石橋先生講義あり。

一月二十六日〔記載なし〕

〔これより戸田義雄記〕

一月二十七日

来室者、小口氏、野村君。午後一時半頃空襲
警報発令。今回は専ら市街を目標とせる投弾
なり。大学のビルも震動すること屢々なり。
田沢先輩、今夜宿直の予定なるも、空襲後の
交通混雑のため御宅より来校するは困難なら
む。野村君と共に帰宅す。 午後四時頃記

〔これより田澤康三郎記〕

一月二十九日

二十七日の空襲の被害は都心住宅地において
甚大。東片町、白山、指ヶ谷、銀座、日比谷
等。新たなる覚悟を要すべし。午後は教授会。
石橋先生、岸本先生御来室。戸田、宮部、野
村君と小口氏御来室。柳川〔啓一〕、冠〔郁
夫〕君の聴講とどけを出す。

一月三十一日

午前中は岸本先生御来室。野村、宮部、戸田君。

夜は野村君御父君の御招待でスキヤキ會。

二月一日

昨夜のスキヤキ會は豪遊、痛飲、快食。大虎小虎大勢。一々は記しません。午後石橋先生御出講。岸本先生も無事御来室。中野君に留守宅宛に照会状を發す。

二月二日

午前中石橋先生御来室。臨時教授會あり。来室者、小口氏、これも無事帰宅せる由。

二月三日

午後出室。入隊の水上〔静也〕君より来信。

二月五日

来室者、宮部、宮手の両氏。午後は教授會ありて石橋先生御来室あり。赤司道雄君と戸田義雄君の大学院考■料納入督促ありしを以て、赤司君の分は事務へ連絡す。宮部野村君の動員より、除隊の通知あり。

二月八日

以文會。

一、日直当日ハ午前八時出勤ノコト

二月九日

教授會あり。

〔これより戸田義雄記〕

二月十日〔記載なし〕

二月十二日

田沢先輩、昨日宿直。今夜学研調査のため和歌山に出張さる予定。為めに正后近く帰宅さる（石橋先生宅に御寄りになる由）。野村、宮部二君、本日より研究室にて執務開始。

二月十三日

御来室、岸本先生、宮部君、野村君は休み。石橋先生より受領せし用件書、事務清岳氏まで届けり。宇野〔圓空〕先生御不在のため、紹介状いただけず、従って宮部君は明日大正大図書館に行くこととなれり。諸井慶徳氏〔昭和

13年卒〕来訪。田沢先輩を訪ね来たりし由（午前中）、宮部君より伝言あり。

二月十四日

宮部君午前十時頃より大正大学に出張。午后野村君来る。宮手氏、岸本君御来室。

二月十五日

愚拙、午前中連盟に行き、正后来室す。宮部君件の論文半分筆写下さる。疲労もあり風邪気味なれば二時頃早退して戴く。野村君に電話にて連絡せんとするも通ぜず。岸本先生御来室。午後一時半頃警戒警報令さる。

〔これより田澤康三郎記〕

二月十六日

午前六時五十分着予定の列車が何度か立どまった為午前十一時近くに東京駅着。危険もあつたが、昨十五日午後六時に唯一、祀廟の神前に跪きえたるは今次の旅の唯一の満足なり。

研究室は無事。いのちのより所の平安をみて感謝あり。艦載機の来襲しきりなり。時局の艱歩を思ふ。

二月十七日

前日にひきつづき午前八時より午後四時頃まで艦載機の来襲しきりなり。この為やむなく欠勤。

二月十九日

来室者、戸田、宮部、野村君。野村君は大正大学へ図書調達の為出向。午後二時空襲警報。B29約百機。代々木方面、日本橋方面、浅草方面に黒焰あがる。代々木方面は敵機撃墜のため、落下傘降下あるも彼我の別不明。浅草方面にて敵一機空中分解、四散せるをみる。皇軍の健闘を■す。

二月二十日

午前七時警報。八時半解除。敵機動部隊未だ去らず。午前九時半来室。部屋の清掃をなす。小使不在の為汚れたる事甚し。午後一時より

以文会。一、図書寄贈、(勤労学徒へ)、その他。

〔これより戸田義雄記〕

二月二十一日

田沢先輩、小泉工場に出動学徒の監督として出張さる。岸本先生御講義(神秘主義、質疑応答の形式によってすすめられる画期的授業)あり。出席者、戸田、宮部、野村
午後警報発令さる。宮部君帰宅。野村君残る。事務室より、勤動係より、回覧板あり。研究室に出動確定の学生は、来る二十六日(月)より、事務室にて出勤の捺印をなすこと。午前九時—午後四時、出務時間なり。この頃独り住居の生活の負担重く、疲労多し。ために朝出勤の時間遅れ勝で申し訳なし。

二月二十二日

午前十一時頃、折柄の降雪についてB29一機来襲せるも、投弾なく、間もなく警報解除となる。宮部君研究執務。野村君休み、底冷えして耐え難きものあり。

二月二十三日

午後石橋教授演習あり。岸本先生担当「東西神秘主義の比較」今回を以て演習は終了。四月新学期より始業のこととなれり。出席者、鱈崎氏、野村君、宮部君風邪のため欠席。社会学々生犬塚紫郎君廿一日午後七時死亡されし旨、社会学々生より報告あり。尚、当研究室借用図書一冊返納ありたり。残り一冊は近日中に同君持参の由。事務より左の取調用紙廻付され来れり。石橋先生、岸本先生と御相談の上記入せり。

	月	火	水	木	金	土	備考
石橋教授	出			指	特指		
岸本講師		出			出		

大島講師			指				
中野助手							*1
田沢研究生	出	出	出	出	出	出	*2

*1 廿年一月十三日入隊至現在

*2 中野助手入隊のため皆勤しつつあり

二月二十四日

宮部、野村、両君執務

二月二十六日〔記載なし〕

〔これより田澤康三郎記〕

二十八日

正午、西小泉より帰学。上野野音の惨害に一驚、宇野先生に類焼、おきのどくの至り。

三月一日

小口氏召応。三月八日入隊。長き指導を思ひ感一入なり。宇野先生を御まみひ。

〔これより戸田義雄記〕

三月十二日

九日夜深更より十日午前四時頃にかけての夜間大空襲のため、都内各所に大火災発生。被害者数並に地域の広大なる、関東大震災より大なるか。本学も医学部物療内科、農学部に被害あり。田沢さんが出発される際、恐らく十五日以後は都内の様相一変すると語り合っただのですが、それよりもいち早く悲劇は来て了った。余燼消えやらぬ現場に立てば、痛憤の情抑へ難し。国民の苦衷に即応する政治の妙味なし。何たる事ぞ。学に励む様の今の姿ではたして臣子のつとめは全きと云へるや、苦悶甚し。野村、宮部両君、各々自宅にて消火に奮闘。両家無事なるは何より。愚拙、疲労と風邪のため身体苦しきため早く帰宅す。

三月十六日

十三日来病床にあり、本日午後研究室に来る。田沢さんより、御手紙あり。帝都の急変を遙

に知り、ただならぬ心慮のみ文なり。当研究室関係者一同無事、この旨早く通知致したきも郵便局多く焼失し、普通の電文はうけつけず、一思案あり。明日小金井より打電と決す。

三月十七日

午後より出務。異常なし。

三月十九日

来室者、野村君、午後石橋先生御来室、教授会あり。愚拙、身体思はしくなく、先に帰宅する。野村君よりの伝言によれば、一ヶ年学業停止の非常処置ありたれど、動員下命までは本学は授業継続。宮部君十日早暁の奮闘がたたりたるためか、容態悪化。遂に十月迄休学することになり。石橋先生に御許可を受けし由なり。

二十日〔記載なし〕

二十一日

来室者 野村君

二十二日

来室者、野村、宮手両君。宮手氏東北に疎開されるため本学会退職の証明書なり。学会の印鑑使用せり。

〔これより田澤康三郎記〕

二十九日

長い間旅行中のところ、本朝帰京。早速石橋教授を訪問御挨拶。留守中の諸事項を承る。戸田君を中野君の後任に、副手を委嘱せんとせしに、同君四月一日横須賀入団ノタメ当分延期の外なし。小口氏即帰のため、お会い出来たるはうれし。二十日の東京の変転又々感ふかし。

三十日

岸本先生みえらる。助教授発会ありたり。研究室疎開の機運、各室にみなぎる。

四月一日

入学式。式後十時より教授会ありたるも岸本先生いかにせられたるものにやおみえなく、第一歩既に黒星。教授会室より新助教授紹介

の拍手しきりと起る。石橋教授と懇談。午後一時、新入生として灘井五郎、畑愷、鈴木裕之の三君を迎へたり。例によって石橋先生より諸事伝達。後、教室を案内して式を了る。学会の会計簿・名簿の整理、久々にて手を染む。

四月二日

午前二時より二時間にわたり、三月十日以後初の大空襲。時限爆弾を使用。吉祥寺、三鷹、小金井、四谷方面に被弾。岸本先生、昨日と本日とを間違はれて早く登学。永き記念事なり。野村、水上、冠、柳川の諸君の聴講採点表を各研究室へ依頼す。会計より三十八円五十六銭の本代支払あり。

四月五日

昨四日、午前一時頃より四時半頃までに敵機来襲。三多摩方面に被弾。爆発洵に激し。睡眠不足の為、昨四日は欠勤。五日、岸本先生御来室。石橋先生御来講。図書の疎開に各研究室の成行を観望して順応の事。来室者、野村君。大島先生より月曜よりの指導の件を通知。外に特になし。

入団せる戸田君の事を切に案じたり。

四月十七日

暫くの間記録を怠りて慚愧に堪へず。この間数日を、研究室の疎開図書の包装にあてる。研究室備付本、森文庫〔森敬之氏(昭和2年卒)旧蔵キリスト教・神学関係洋書286点〕、並に岸本先生の御書架を整理、十六日に完了。十三日、十五日の両日、夜間大空襲ありて、東京の相貌全くあらたまる。焦土と化せる東京の明日を思へば、新たなる意志、自ずとわく。四月十三日、沖縄攻防戦酣なる中に米大統領ルーズベルト急死、これを以て敵の攻勢頓に緩むとは思はれざれど、世界の情勢又いかにか変移せん。後世の史家これをいかにとや云はん。

四月十八日

疎開荷物の荷造り最後の仕度。著者カードの整理。

総数 書籍 九六

カード 一

計九七

四月十九日

午前中に荷物をトラックに搬出。万事好手順なり。野村、宮手、灘井の諸君種々協力を惜しまれず、洵に感謝の至りなり。沖繩攻防戦大戦果挙る。敵艦隊正に潰滅の前兆あり。感涙の外なし。空襲警報鳴る。B51来る。

四月二十日

午前九時より飯田町駅より各研究室共同ニテ図書を搬送完了。

午後石橋先生御夫人永眠さる。葬儀等御手伝の為、岸本先生、宮手さん、野村君、鱈崎氏方と同道、御弔問す。

四月二十一日

石橋先生宅御葬儀

四月二十三日

宮部智君が去る十六日八時半死亡昇天の報御通知あり。暗然としてただ君を偲ぶのみ。つつしみて冥福を祈る。

四月三十日

天長の賀節を昨日に寿ぎ国寿万才をいのる。午前八時より宗教学の試験あり。午前中ハ空襲。

五月一日

〔これより野村暢清記〕

五月四日

来室者 灘井畑両君。宮手氏見えず。激労の為身体状況悪化せしかと心配さる。古道正進氏〔昭和13年卒〕より岸本大畠田澤諸先生に転職の挨拶来る。

五月七日

来室者 石橋岸本大畠諸先生及び宮手灘井の諸氏。大畠岸本両先生講義あり。大畠先生より十日十一時半より岸本先生助教授就任の御

祝ひ兼新入生を迎へたる慶びの会を当研究室にて致さんとの話しあり。之に決定。諸先生及び鱈崎小口諸先輩に御知らせす。田澤さん居られぬ事淋しくたよりなく残念也。日本出版会より雑誌用紙報告書の調べ来る。

五月八日

来室者 岸本先生、宮手灘井畑の諸氏。図書館五階姉崎先生の書物の主要なるものの荷造り及び東洋文化への搬出終る。宮手灘井畑の諸氏の御手伝による。会の件宇野先生深川〔恒喜、昭和11年卒〕宗務官に御知らせす。皆喜んで御出下さるとの事なり。井戸鈴木両君には手紙にて通知す。内務省の関さんより御電話あり。

五月九日

来室者岸本先生、杉浦〔健一、昭和6年卒〕先輩、灘井君。ドイツ無条件降伏す。ロンドンニューヨークは喜びにつつまれ居るようなり。うらやまし。されど我等は頑張らん。日本栄光の為に、生存の為に。

五月十日

本日午前十一時半より当研究室に於いて岸本先生助教授就任及新入生歓迎の慶びの集ひを開く。食糧も割りくににぎやかに、会はなごやかに石橋宇野岸本の諸先生長き懇切なる慶びの辞又決意の言葉あり。

集会者 石橋先生、宇野先生、岸本先生、大畠先生、藤本先輩、小口先輩、鱈崎先学、宮手女史、灘井君、畑君、野村、以上十一名。田澤さん居られなかった事誠に残念なり。

五月十一日

来室者岸本先生灘井君。建国大学研究院より研究院月報43, 44, 45号来る。又、田澤さん当松本かつ子様より御手紙あり。

五月十二日

来室者岸本先生、杉浦先輩、灘井君。

五月十四日

来室者 岸本大島両先生及宮手さん灘井君。
大島先生講義あり。岸野〔桐野〕事雄（昭和十二年卒）氏より岡山県都窪郡山手村〔住所詳細略〕へ移転通知あり。卒業生名簿に移動記入。教学新聞来る。社会横山氏より御電話あり。~~十九日田澤さん受持の宿直を氏の二十八日の宿直とかはって戴きたいとの事也。そのやう御願ひし置きたり。~~

五月十五日

来室者

岸本先生、宮手囑託、灘井君、山本多門氏、飛島國助氏、丸山素意氏より御手紙あり。宮手さん国民検査の為学会の印を用ふ。午後宮部君三十日祭へ岸本先生を御案内する。宮部君母君非常なお喜びの様なりき。

五月十六日

来室者大島先生、岸本先生、灘井君。

五月十七日

田澤さんよりの御手紙拝受す。来室者宮手灘井両氏。歴史学研究（雑誌来る）、今日帰りに日配第三課に行く。

五月十八日

来室者 岸本先生、宮手灘井の諸氏又杉浦先輩。東洋史泉〔康順〕さん何日に勤勞奉仕の方に行くか分らぬとの事なり。田澤さん御用命の書ね本日日配に参りましたがなく、井上其他にもなし。赤司さんよりの御手紙あり。

五月十九日

泉さん何時行かれるか分らぬ故田澤さん当手紙を取敢えずお託しす。神田にも例の書なし。今日は空襲警報なりたるも大した事なし。岸本先生灘井君小倉長太郎氏より御手紙あり。

五月二十一日

来室者 岸本先生、宮手さん、灘井君の諸氏。教学新聞及宗教公論来る。奥平貞氏より御手紙あり、田澤さん帰られず。先生出勤日次の如し。岸本先生 月火水木、大島先生 水

金。宮手さん先生の洋服ケートルのホコロビをぬふ。女なればこそ見事なり。

五月二十二日

来室者 岸本先生、齋崎さん、宮手さん、灘井君、戸田さんより御葉書あり。午後一時より野村研究発表皆様に聞いて戴く。甘藷苗今日までお待ちしたるも今日三百本として申し込む。

五月二十三日

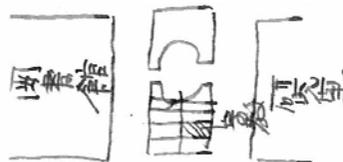
来室者 大島先生、岸本先生、宮手さん、灘井君。大島先生の甘藷に関する講義皆して聞く。午後灘井君の女子低価値論を聞く。美学大学院学生がよく研究室に来る方田澤さん三十円、戸田さん十円返金に来られたり。よろしく申し下さんとの事なり。小生お預りして置く。此の後戸田新夫人に御かへしす。

五月二十四日

大空襲あり。省線不通。来室者なし。損害を受けたる者相当多き事推察さる。ただ不屈の心大和はらからにあらん事を祈る。まことに気の毒なり。灘井君当御兄さんよりの御手紙あり。岸本先生御出になる。

五月二十五日

来室者 大島先生、宮手さん。本日各研究室の甘藷耕作地の割当てありとの事にて十時半より田澤さんのかはりに出席宗教の耕作地次の如く決定す。



五月二十六日

来室者なし。大空襲なりき。帝都大凡灰燼に帰す。

五月二十八日

来室者 小口さん。姉崎宇野両先生宅敵火に消ゆ。教授会あり。宗教は両先生共来られず。省線^{ママ},仲野より此方不通なる故なり。

五月二十九日

来室者なし。未だ電車殆んど不通なり。

五月三十日

来室者 宮手さん。省線今日初めて通る。経堂成城もやられたる事。但し大島先生は大丈夫ならん。

五月三十一日

来室者 岸本先生, 宮手さん。岸本先生に心より御同情申し上ぐ。午後三人にて姉崎先生宅跡に行く。焼跡に立ちて先生・・・

増田〔(高木)きよ子〕さん焼跡に来られ四人にて帰途に着く。小生先生の記念品お預りす。田澤さんよりお便りいただく。

焼原にてはちうえの美しき花み我が心の荒みしを哀しみ

草花のやさしき^{ころ},趣解し得ぬ

人とはなりて焼原に立つ

六月一日

来室者 宮手さん, 岸本先生来られず心配なり。今日灘井君関釜〔下関釜山連絡船〕に乗るはず。安全を祈る。

六月二日

戸田さん新^{ママ},婦人かぎまだみつからぬことおわびに来らる。しばし色々のお話をうかがふ。田澤さんへ松陰の書お渡し下さるよう東洋史にお願いします。

六月四日

来室者 石橋先生岸本さん宮手さん。

石橋先生わざわざ来られたるも本日教授会なし。先生宅の附近にも焼夷弾の落ち先生も奮闘の由受たまはる。岸本先生明日より身延〔疎開先〕に行かる。来週月曜に帰られるとの事也。石橋先生宅まで紙三百枚程お持ちす。宮手さんを又わづらはせたり。

六月五日

来室者なし。

宗教研究室の畑を少しこしらへる。金子靈学氏より移動通知あり。学会名簿に記入す。

六月六日

来室者, 宮手さん。

新潟勤労学生に送る書物に関し, 石橋先生に御電話す。十冊ほど概論風のもの出して置けとの事。午後宗教の畑を造る。大体完成せり。十月にも先生方と共にいもの会の出来ん事を祈りつつ。

六月七日

来室者なし

戸田さんより御葉書あり。又武田清澄氏より移動通知あり。学会名簿に移動記入す。私明日八日は軍公用に三日缺勤致します。

苗本日^{ママ},当着す。申し込み三百本割り当て百三十本との事。四十三円事務室にてはらふ。

三百本の内分けは大島先生百本, 田澤さん宮手さん野村にて二百本の予定なりき。

新潟行書物当研究室は

神道學概論 溝口〔駒造〕氏著

回教概論 大川〔周明〕氏著

佛教概論 金子〔大榮〕氏著

宗教学通論 宇野〔圓空〕先生著

イスラエル宗教文化史 石橋〔智信〕先生著

日本宗教史 土屋〔詮教〕氏著

日本佛教史の研究(1)(2) 辻〔善之助〕先生著

宗教社会学 古野〔清人〕氏著

民族宗教の研究 棚瀬〔襄爾〕氏著

以上の十冊なるも

社会の如き洋書二百冊程なり。田澤さんの御帰りを切望す。印哲はなしとの事なり。

六月八日

小生防衛招集にかかるところなりしが, 学生は結構ですとて自由の身になり, 登校後四五時間畠を耕す。中々なり。田澤さんのお帰り今日昨日ならん。三時頃より大島先生宅までお持ちする予定。

六月九日

来室者、宮手さん、小口さん。

小口さんのお手伝いいただき東洋文化の小使さんや宮手さんと共に畠の植付けを終る。

六月十一日

来室者 石橋先生、宮手さん。岸本先生より教授会出られぬとの電報あり。石橋先生わざわざ来られたるも教授会なし。田澤さんの御留守に申訳なきも老人疎開の附添として京都に明日より行かねばならぬ事になりたり。宮手さんに留守お願い申訳なし。宗教学会の日本学術会入会申込み書、石橋先生におわたしす。

〔これより田澤康三郎記〕

六月十六日

昨十五日四十余日ぶりにて新宿の勤労作業地より帰任す。留守中の諸兄より与へられたる厚誼を感謝す。

六月二十日

昨十九日と両日石橋先生のお宅へ参上。疎開

図書の手伝ひ。自動車来らざる為未だ本は出ず。

六月二十三日

野村、宮手、鱒崎の諸氏と共に恩方村なる岸本先生を訪問。一日清遊す。この日、新潟外へ疎開図書六ヶを発送。研究室本一、鱒崎、岸本両氏の分五十ヶ。

六月二十五日

冠郁夫君入営の挨拶あり。

〔これより、日誌は途絶える。次の頁に「八月十一日 文献調査に関する廻覧有り」（戸田義雄筆）という一行が見えるのみである。〕

*

くずし字の判読に際して、東京大学国文学研究室・河野龍也助教にお世話になった。また高木きよ子先生に草稿をご覧いただき、ご教示を受けた。記して感謝申し上げる。



昭和20年5月26日の空襲で全焼した小石川白山御殿町の自宅書齋における姉崎正治。正面の本棚に立ててある肖像写真は高山樗牛のものに見える。